24時間培養を行ひてガス産生の有無を検したところ，総て陰性の結果を得た。

又雑菌検索のためには，普通寒天培地に各検体10倍稀釈液各 0.1ccを塗抹して48時間培養後発生せる集落に就き観察せるところ，検体Bに於いて葡萄球菌検出せられ，その菌数は1cc中56個を算した。

以上の如き各成績を綜合して按ずるに，各製品中に含有すると自称さるる乳酸菌とは，夫等の各形態学的並びに生物学的諸性状よりして，A 及び B は Streptococcus lactis，C は Lactobacillus acidophilis の如く推定された。

又含有生菌数に於ては，該品夫々が標示する各1cc中の数字に対して，Aはその約1萬分の1，B並びにCはその約100萬分の1に過ぎなかつた。尚ほBに於ては雑菌としてその1cc中に葡萄球菌56個の発生を見たる事は特に重視すべき点なりと考へる。

13　昭和32年10月甲府市内某保育園に発生せる流行性腎炎に就いての細菌学的及び血清学的検査成績

本田玄四郎

昭和32年10月初旬より中旬に渉り，甲府市内某保育園に流行性腎炎の患児が多発した。

即ち，保育園児41名中腎炎を主徴とするもの6名，「アンギーナ」を主徴とするもの6名，他に感冒様症状を示したもの11名であり，其の発症の経過としては同園々児1名の或る者が10月上旬東京方面に旅行し帰宅数日後発熱及び咽頭痛等の初発症状を以つて発病し，逐次他の園児に蔓延せるものゝ如くである。経過は概ね 2〜4 週間を以て治癒し又患児は自宅隔離，入院治療等夫々適当なる処置に依り他に蔓延することなく同月下旬終熄するに至つた。

当科に於いては，この事例は近時小児の奇病として話題となり，多くの報告例に見らるる溶連菌に由来する伝染性疾患ならんとの推定の下に，該園児等について原因菌の究明に着手し，検索を行つた結果，次の如き成績を得た。

1.　血清学的検査

園児を腎炎，「アンギーナ」及び未患の三群に区別し，腎炎患児5名，「アンギーナ」患児6名及び未患児3名より夫々採血し，得たる是等血清について Antistreptolysin O 価測定及びこれの比較を行つた。

対照血清としては，同園に全く関係のなき健康成人女子のものを使用して同時に行つた。是等の成績は下表の如くであり有意の差が認められた。

第 1 表　園児の抗ストレプトライシンO価測定成績並に比較

区分	例数	抗ストレプトライシンO価								備考
		12	50	100	125	166	250	333	500	
腎炎	5					2		1	2	3才…4名　5才…1名
アンギーナ	6	1		1			2	2		3才…1名　5才…2名 6才…3名
未患	3		1	1	1					6才…3名
対照(健康成人女子)	1		1							21才…1名

附　　記

1.　材料採取当時未菌児群にあつたものにして溶連菌の分離した6例中，後日発病したもの3例その年令別は6才2例，5才1例である。

2.　腎炎児4名中溶連菌の分離したもの1例（3才男），「アンギーナ）患児5例中よりは1例（5才男）である。

上記第一回の実施後更に2週間を経て再び採血を図つたが，事情により2名のみ採血し得たので腎炎の新患者1名の血清と同時に第二回目の測定を実施したその成績は，下表の通りである。

第　2　表

氏　　名	回数別	血清稀釈倍数												摘　　要
		12	50	100	125	166	250	333	500	625	833	1250	2500	
平賀　孝	第一回	0	0	0	1′	1	3	3	3	3	3	3	3	15/X，未患，採血
〃	第二回	0	0	0	0	0	1	2	3	3	3	3	3	29/X，発病，採血
平賀　強	第一回	0	0	0	0	0	1′	1	3	3	3	3	3	15/X，腎炎，採血
〃	第二回	0	0	0	0	0	1	1	3	3	3	3	3	29/X，　採血
海瀬しぼみ	第一回	0	0	0	0	1	2	3	3	3	3	3	3	30/X，発病，採血
対　照（健康成人男）	第一回	0	0	0	1	3	3	3	3	3	3	3	3	／

（註）第一回，第二回とも，Difco 製 Streptolysin O Reagent を使用した。

2.　細菌学的検査（溶連菌の検索）

腎炎，「アンギーナ」等患者及び未患児39名について咽頭より滅菌線棒を以て検体を擦過採取し之を直接血液寒天平板に培養しその綿棒を Bouillon 培地に投入培養した。平板については24時間，Bouillon については10時間培養後に血液寒天平板に分離培養及びその0.5%cc を血液寒天に養混釈培養を行いて24時間培養の結果を観察した。

発生せる集落の溶血性状より次の如く菌を分離した。

（1）定型的のβ型を示したもの。

イ，腎炎患者5例中1例

ロ，「アンギーナ」患児6例中1例

ハ，未患児28例中7例

（2）分離した溶連菌の性状の二三を挙げれば下の通りである。

イ，小林分類法による各種血液寒天培地上の所見。

分離株9例とも，5%馬血液寒天上に於いてβ型を，1%ブドー糖加馬血液寒天上に於いてのα型を，5%緬羊血液寒天上に於いてはβ型を著明に現はしている。

従つて以上の成績のみからすればI型に属するものと思はれる。

ロ，胆汁感受性については10%胆汁加血液寒天上に於いては僅かに発育集落は小型であるが

明瞭に認められ，40%胆汁加血液寒天上には全く発育を認めない。

ハ，薬剤に対する感受性について9例の分離菌に対して，感受性デイスクを使用して観察したるところ，ペニシリンに対して最も高度の感受性を示し，オキシテトロサイクリン，クロールテトロサイクリン及びクロラムフエニコールの順でこれに続き，ジヒドロストフプトマイシンに対しては 1 mcg/cc に耐性を示し、サルフアイソキサゾールでは全く感受性を示さない。

以上の如き諸成績よりして，玆に得られたる5名よりの分離9菌株は総て溶連菌A群に属するものと推定し得た。然し，各型の免疫血清の手持ちなかりしため，群並びに型決定のための血清学的診断による成績に就いては，検査を依頼したる神奈川県衛生研究所よりは，9菌株とも総て溶連菌A群に属する事，その中の6株は12型，他の3株は未定なりとの，又同じく東京大学伝染病研究所よりは，9株とも同じくA群に属し，沈降反応の結果是等はは総て12型と考へらるとの夫々の回答を得た。

叙上の如き経過並びに成績よりして，本事例は溶連菌A群中の Type 12菌の感染によりて惹起されたるものと推論している。

終りに，東京大学伝染病研究所工藤正四郎博士，神奈川県衛生研究所長児玉威博士並びに両研究所関係所員の方々の御厚意に対して深く感謝する次第である。